
Little Brave

常磐 誠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Little Brave

【Nコード】

N8851Y

【作者名】

常磐 誠

【あらすじ】

僕と美鈴はずっと、ずっと幼い頃から一緒にいた。だけど、突然彼女は心を閉ざした。……あの日以来。僕にできることは一体何だろう。そう思いながら過ごす日常の中で、僕と彼女は様々な出会いの中で、色んなことを感じながら、迷いながら、少しずつ、歩いてゆく。

これは、そんな僕たちのちっぴけな第一歩のお話。

この作品は現在F C 2小説からの移転作業中です。改訂しながら移転しております。どうぞよろしくお願い致します。

この作品をP Cで読まれる方は縦読みで読んでいただくことをおすすめ致します。右上にある縦読みにするボタンのクリックをおすすめ致します。意図的に改行毎の空白を少なくしているため、横読みでは目が疲れる可能性があります。携帯でお読みの方は読者側の設定で空白の数を増やす設定が行えますので、そちらの方で読みやすい余白数に設定をお願いいたします。

第1話の少し前（前書き）

数ある作品の中で、この作品に手を伸ばしていただいたことに、深く感謝を申し上げます。本当にありがとうございます。

第1話の少し前

……なぜ、なぜこのようなことになってしまった……？

いつから。もはやまともなしこつももてなくなってしまった。

おれはだれだ。あいつは、だれだ。

いつもいつもいつもおれはあいつあれあおれだあいつだれだれだれだれだれだれだれだ……いつも。

あいつは……あいつ……ここに。

あいつ……だれ……。

もう、いい。あいつ、だれで、かまわん……。

いま、おれあ、おれ、これが。こいつ、これ、おれは。

これ、そして……。それを。

また、まただ。もう、これを最後に、これを、最後に。考え続け
思い続けて。

俺は、この先、一体。

もはや、こうしてまともな思考できる時間も、少なくなった。

一体、俺は。

何故、こんなことになっちゃった……。

第1話 間違っているはずの幼心

雪がちらつく朝の六時。僕は隣の家まで歩いていく。出来るだけゆっくりと。この体はそんなに急いで動くことが叶わない。

それは僕が隣の家に行くことを嫌がっているわけじゃない。雪のせいで滑りやすくなっている道が、時折吹く北風が、そして何よりちらつく雪自体が。

もつと言うのなら、寝起きの状態である僕自身が僕の動きを阻害しているんだ。

陰鬱な雲は、雪という白を僕に見せ付けるくせ、その上にある太陽の眩い白を、僕に見せることをしない。

僕は隣の家にいる子に会うことを嫌がっているわけじゃない

「ほら、ついた」

昔、僕の母が僕の手を引き、よくこの家に来ていたことを、今でも僕は忘れない。物心ついた頃から僕達は、一緒にいた。

「もうあたしたちはきょうだいだな」

そう彼女が言っつて、僕達の親を、笑わせたこと。今でもはつきり思い出せる。

「じゃあ、どちらがおねえさん？ それとも、おにいさん？」

そんな風に、僕の母が聞いた時、何の迷いもなく、

「もちろん。あたしがおねえさん！」

と言い切り、僕とけんかになったこともありありと思い出す。誕生日は、僕の方が二ヶ月も早いんだ。僕はそう言った後、彼女のハイキックをもろに食らい、すぐに母に泣きついた。今思い出せば、なんと微笑ましいことだろう。

彼女の家の前で、僕が逡巡するこの様は、一体……何だというのだろう。あまりに、無様な、この様は。

僕が、彼女の家の門の前のインターフォンを押すことさえも躊躇しているこの様は、一体、何だというのだろうか！

僕はこの家に来ることが、嫌なわけじゃない

結局、僕はインターフォンを鳴らすことをせず、家に入る。合鍵は、僕の母がどういう訳か手にいれていたものを使う。

「おはようございます」

頭を下げて、家に入る。

返事は、ない。いつものことだ。いつものことだ

第一あまりにも、無意味なことだ。

結局、これは単なるポーズなのだ。おはようございます。おじやまします。この声だつて、頭を下げ礼をする姿勢だつて。返事なんかくるはずがない。この家には大人がいないじゃないか。

起きていくくせに。気付いているくせに。僕に人の家にかかる時に礼を、挨拶を、求めてきた大人が、今それを従順に守る僕を無視している。毎朝、欠かさずこうして隣の家に上がる度に、こうして毎日同じように僕を見据え、そして見ない、そんな大人に、僕は乾いた気持ちを抱いたままで、玄関からすぐの、彼女の部屋へと、向かう。

ネグレクト。

そう言ってしまうえば、括ってしまえば、全ては楽になるんだろうか。顔は作り笑顔で、僕は彼女を見つけて、おはようって、言った。彼女は、体をびくりと震わせて、縮こまってしまふ。

何ら驚くことなんてない。毎日こうやって当たり前のように繰り返される、……即ち、日常。

「大丈夫だよ。美鈴。僕の家で、朝ごはんを食べよう。お母さんが、おいしいご飯、作って待ってるから、さ」

笑顔で、まるで小さい子どもに話しかけて安心させるように、僕は彼女に、美鈴に、手を差し出す。

「本当？ 本当にそれだけ？」

そういぶかしんで、僕の目を見つめる美鈴の目つきは、かつての恐怖を、出来るだけ避けようとする、そんな必死の自衛を感じさせる。

「大丈夫。本当にそれだけだよ」

そうにつこりと笑って、手を差し出しなおすと、ようやく美鈴は僕の手をひし、と掴んだ。そして、そのまま、パジャマ姿に僕が持つてきていた上着を着て、手袋をつける。ただそれだけの姿で、僕と美鈴は僕の家まで向かう。

いまや美鈴の家に家事をする者など誰もいない。元々美鈴の父親は生活力なんかこれっぽちもありはしなかった。料理、掃除、洗濯、そういった家事という家事その全てを美鈴の母親に、時には僕の母に押し付けていた。

そして、そのお母さんが離婚してこの町から出て行ってしまったから、あの人は抜け殻みたいになった。

しばらくは、美鈴が必死に頑張った。あの人にできない料理も、掃除も、洗濯も、全部頑張っていた。

だけど、あれ以来、美鈴が頑張れなくなってから。あの家は、完全に崩壊した。それほど広くもない庭は、雑草という雑草によって見るも無残になった。

美鈴の母親が、そして美鈴が、水やりとか、雑草抜きとか、頑張っていたその姿が、今では何一つとして残っちゃいない。金属という金属、例えば庭先の物干し竿、例えば門の所々。それらはサビで汚くなっていた。

何かの事情で身寄りがないあの一家の、その惨状を見かねた僕の両親が、彼女の私物、着替え、そういったものを全てを、あの家から持つてきて、そして、平日は朝と夕、土日、祝日には朝、昼、夜の全ての食事の面倒を見ている。あの人にも、僕の母は誘いの声を掛けたけど、あの人は聞く耳すらも持たなかったという。

あの家が壊れていく時に、両親、主に母は、

「美鈴ちゃんにはちゃんと優しくしてあげるのよ」
だの、

「美鈴ちゃんに変なこと言っちゃ駄目よ」
だの、

「家のこと、聞きたくても絶対に聞いたら、駄目よ」
だのと、様々なことを僕に言った。

……両親には、もしくは、あの人や、美鈴のお母さんは、いいや、もしかしたら、美鈴本人も、こんな風になってしまふことが、わかっていたのだろうか？

もし、もしも、わかっていたと、言うのなら。何故、救ってくれなかったのだろうか。美鈴だけでも、救い出すことは、出来なかったのだろうか

僕はいつもそんなことを考えながら、毎日、365日、そんな風に考えながら、僕の家在美鈴を招き入れる。

今日の朝ごはんは、美鈴が幼稚園の時から好きだった、フレンチトースト。美鈴が大好きな、甘ったるい匂いに、美鈴はいきなりハイテンション。手を洗い身支度することさえも忘れて、

「おばちゃん、おはよー！」

と、母に抱きついてた。

「いやいや。手とか洗わなきゃ。いつつ美鈴はこうなんだから……」

僕がそうやって美鈴の手を引いて洗面所へと向かう。

退行。美鈴があれから、あの出来事以来、起こっている事象の名前。今の彼女は、小学校中学年程度。年齢にして、十歳とか、そこいらの精神状態なのだそうだ。

今だって、僕達はまだ十三歳でしか、ないのだけれど。だけど、今の僕たちの十歳と十三歳は、あまりにも、遠い。

フレンチトーストで上がったテンションに合わせて手を泡まみれにしてはしゃぐその声を聞いて、その姿を見る度、僕はとても悲しくなる。僕には、何も出来なかった。そして僕は、今も何も出来や

しない。

中学校に入学して、四回行われた試験での僕の成績は常にトップクラス。それでも、僕は知らないことだらけで、そして、今、僕の目の前に横たわっている、一番の問題。それを考えた時に、行き着く答えは、いつだって単純なんだ。悲しい。ただ、それだけ。

存外簡単で、それは小学生にならないくらいの。そう、今よりもずっと小さく、無邪気だった僕らだって、当たり前のように感じ、思い続けてきたその感情。それが、全てなんだ。

「おいしーなあ。な、和真？」

そんな風に話しかける美鈴に僕は相槌を打つ。彼女の言葉も、無邪気なんだ。そして、その無邪気さゆえに、僕は目に今すぐにでも込み上げてきてしまうものを、必死に、堪えようとして、そして、苦しそうな笑顔を見せてしまう。

その顔は、まるで、何か悪いことをしたその後、苦しい言い訳をしている子どもみたいだ。何で、周りの人間は、それに気付かないのかなと、思う。

でも、気付く人がいたって、僕はどうせ

「そんなことはありません」

そう毅然と言い放つに決まっている。

日常は、そんな風に展開していつて、そして、こんなにも無邪気な美鈴を置いて、僕が一人で勝手に苦しむその様は、何より滑稽だと、思う。

身支度を整え、時計を見る。七時三十分。僕の足で歩いて35分今の美鈴を引き連れていくのなら、更に10〜20分は余計にかかると、美鈴は首を必死に横に振る。どうしたの？ 母が聞く。

「嫌だ！ 和真は私をイヤなところに連れて行く！ 私は騙されないぞ！ 私は怖いところにはいかないんだ！」

学校に行くために家を出る、そう言った、ただそれだけで、美鈴は今にも泣き叫んでしまいそうなくらいに、半狂乱になって暴れる。

あれ以来、ずっと、毎日。平日は、ずっと。……ずっと。

「大丈夫だよ。怖くないよ。みんな待つてる。ずっと美鈴が行ってる学校じゃないか。……大丈夫だよ」

そんな風に僕が言っつて、それでも暴れる美鈴を、僕とお母さんの二人でなだめ続けて。ようやく、私服の美鈴は、制服姿の僕と共に、家を出る。

そんな毎日を僕と美鈴は続けてきた。そして、続けている。

登校中、美鈴はズーッと行つてる学校の話をする。

その、ズーッと行つてる学校というのは、僕達が卒業したはずの小学校のことだ。その、特別支援教室だ。

僕達が卒業したその翌年から、その部屋には、特別な事情を持った子が安心して通えるような、こころを病んだ美鈴や、色んな事情を持った子ども達が通える環境が作られた。

上手く人と日常生活を送れなくなつた美鈴と、そんな美鈴に危害を加えない子ども達とが、一緒に過ごす環境。ここにいれば皆危害を加えられることがない。美鈴はそこで安心してお姉さんぶつて、過ごしているんだ。

楽しい時間なのだろう。僕は、美鈴の無邪気な笑顔を見るのが悲しくてしょうがない。

だって、……本当は、本当は、その笑顔は僕が通う中学校で、僕と同じクラスで、クラスの人間達に向けられるものであるべきなのだから。

小学校の特別支援教室担当の先生が、そんな僕に気付くことはなく、そして、僕もそれをそういう人達なんかに見せたりしない。美鈴にも、悟られないようにして、僕は学校へと急ぐのだ。

そうしなければ、僕の中にある何か、は、静かに切れ落ちてしまひそうだから。

僕が通う鎌原中学校、そして今美鈴が通っている鎌原小学校。この二つの学校は、ゆうに二百年を超える歴史を持っていて、そして、互いに隣り合わせになっていることも、この地域の人たちにとつ

ては有名だ。近隣には公園や、木がたくさん植えられている、近隣に都会がたくさん出来ているけれど、この場所は、たくさんの自然に囲まれている、いわば田舎町だ。

そういう学校柄だから、小中学校の交流も、たくさん行われていて、そして今年の夏には、今美鈴がいる特別支援教室との交流も、行われた。

でも、今は美鈴がいるから、来年以降これがどうなるかは、わからない。……けど、もうそれは暗黙の了解みたく、なっていることだろう。

学校は、本当に当たり前のように日常を繰り返す。全ての授業、つまらない教師のHR。一つ、僕の傍にぼつんと空いた空席は、もう空いていることが当たり前になってしまったかのように、クラスのみんなは日常を過ごしている。もう僕を含めた誰もが、間違つて美鈴の名前を日直の欄に書くこともないし、心配も、しない。もうこのクラスは美鈴がいない日常の方が、当たり前の日常になってしまっているのだ。

……学校が終われば、すぐに僕は美鈴を迎えに小学校に向かう。学校が終わった後、靴箱の所で待つ彼女は、ずっと沈んでいる。楽しいだけの時間が終わる。そうして弱った彼女は、隣にあるはずの中学校にも、僕が手を引いていなければ、歩いてくることもできないのだ。

その日の帰宅時、雪はとうの前に止んでしまった午後の時間に、美鈴がとあるものに興味を持った。

和真。あれ。そうやって美鈴が指差したのは、白い野球ボールだった。学校からはそれなりに離れた場所だったから、学校のものではないだろう。投げてみたい。美鈴が言う。

幼い頃、ボーイッシュで、ボールも上投げをする美鈴は、幼い僕にとって、遊ぶ方法でケンカする必要があるという意味で、ありがたかった。美鈴は、ママゴトには、全くと言っていいほど、興味を持たなかった。

ただ、美鈴は致命的なノーコンで、絶対に僕がミットを構えたところにはボールを投げてくれなかった。30分も経たない内に、僕が疲れ果てるか、僕の体のどこか　それは顔面だったり、男子特有の急所だったり　にぶち当てられて僕が泣くかして、終わっていた。

小学校に入り、僕が5年生の頃から2年間続けてきた少年野球。今なら昔より体力もあるし、体に当てられて泣いてしまうようなこともないだろう。幸運なことに、昔使っていたグローブは、古いけれども二つある。サイズが小さくなってしまったものは、きつと美鈴の手にはぴつたりだろう。それに、今日の宿題は、本当に僅かなもので、しかも得意な数学だ。寝る前の10分くらいで終わらせられる。

そう考えた僕は、家に帰るなりすぐに、二つのグローブを準備して、美鈴の手を引き公園に急いだ。何故公園に僕達が走ってしまったか、そんなことはどうでも良かった。忘れたい何かでもあるのか、それとも、昔に帰ってしまったかたか。……どうでも良い。そんなこと、どうでも良い。

上投げの美鈴は、やっぱり昔のまま、ノーコンだった。投げたボールが僕まで届かない時があれば、逆に僕の上に僕がいたって届かないような高さにボールを投げることもあった。更には右にも左にも思い切り走らされ、キャッチボールをしているというのに、

「テニスプレイヤーってのは、こんな気持ちなのかな。確かにきついな」

と、全く異なる種目をしているような気持ちになってしまった。それでも、昔と違って、体に当てられることはなく、休憩を挟んで30分耐え切れた。

僕はキャッチボールという単純な行為に飽き始めてしまっていたりもするけれど、美鈴はあれだけボールを放っておいて、まだ飽き足らないという笑顔で、

「またするぞ。準備しろ。今すぐにしろ。はやくしろ」

そうやって急かす。そこで僕はとある提案をした。それは、

「美鈴はさ、女の子な訳だし、下投げしてみようよ」

という内容で、僕は一回下投げで美鈴にボールを放った。

ボールを受け取った美鈴は嫌がっていたけれど、それでも美鈴はそうやって投げてくれた。

やっぱりそれなりにノーコンではあったけれど、それでも僕は足を両方動かす必要が無くなった。軸足を動かすことなく球を取れる感覚は、なんだか懐かしい感じさえした。

そうやって九球。そして十球目。むすつとした顔の美鈴は、嫌がらせなのか、僕がいる方向とは全く違う、というより、僕と正反対の方向にボールを投げた。下手投げだけど、思い切り。

「えーっ！」

僕が叫ぶのも無視して美鈴はそっぽを向いてしまった。

「何でそんなことするのさ」

ボールを全速力で取りに行ったら後に僕は美鈴に聞く。すると美鈴は、

「あれじゃ速い球が投げられん。駄目だ」

と怒っていた。

「ああ。なるほど、速さにこだわりがあったんだね……」

昔からかつこいい、とか、速い、とか、そんな男の子が喜びそうな文句に対して喜びを覚えていた美鈴は、やっぱり今でもそういう風に思っているんだろう。僕も迂闊だった。

「それならさ、下投げでも速い球が投げられる方法を教えてあげるよ」

そう言っ僕は、ボールを握っている腕を一回転させて球を放つ。球は公園の中にあるトイレの壁に当たって跳ね返り、僕のグローブへと戻ってきた。その様子を見た美鈴は、

「おお。すごいぞ」

そう言いながら僕の真似をするように、トイレの壁に向かってボールを投げ続けた。

ウインドミル、っていうんだよ。そう僕が教えると、

「ういんど、みる」

美鈴はきよとんとした顔で僕の言葉を反芻した。

「なんか甘そうな名前だな。ういんどみる」

そんなことをいう美鈴に僕は、甘さの基準がわかんないけど、そうだね。甘そうだ。そう笑って返した。更に何球か投げている内に、美鈴は

「おい、和真。私、なんかこの投げ方、見たことあるぞ!」

そんなことを言った。きつとテレビだろう。だから、うん。そうだね。と適当に返した。

「おい。座れ。いいから座れ」

そうやって僕の袖を引き、強引に座らせて構えさせると、美鈴は満足そうな顔して、

「うん。こんな感じだった」

そう言って目を輝かせた。僕達の今の状態は、九回裏、2アウト、満塁。美鈴にとっては、そんな感じなんだろうか。美鈴はソフトボールどころか、野球のルールさえ全然知らないから、そうは思わないだろうけど、でもきつと自分の中で燃えるシチュエーションとかを勝手にイメージしているに違いない。

「投げるぞ!」

美鈴が力強く僕にそう言って、投球フォームに入る。両足ともきちんと地面につけて、大体二秒静止。偶然だろうけど、ソフトボールのルールをきちんと守っているフォームを見て、僕は不思議と感心してしまった。

でも、それと同時に少しだけ思った。それはちょっとした後悔。

ああ、やっぱり座らなければ良かったかな。ウインドミルは腕を回転させる複雑な動作があるし、コントロールは難しい。きつと大暴投するだろう。上かな、横かな。立っていた方が、楽に取りにいけるのに。

そう考えていた。……だけど。

ヒュツ！ スパンツ！

ボールは、僕が構えていたその場所に風切り音とミットとの衝突音をたてて、寸分違わず入っていた。ストライクゾーン的に考えると、ど真ん中。バッターがもしバットを振らないか、空振りしていれば、ストライク。当たり前のことなんだけれど、これは凄い事だ。僕はかなり興奮した。

凄い。凄いよ。美鈴！僕は思い切り叫んでしまっていた。美鈴は怪訝そうな顔をしてしまったけれど。でもこれは本当に凄い事だと僕は思った。ノーコンの美鈴が、ここまでの投球をしたんだ！本当に凄い。

その後何球試しても、美鈴がウインドミルで投げる球は、確実に僕が構えるところに吸い込まれていく。高めのボール球。内角低めのギリギリ一杯。どこに僕がグローブを動かしたって、美鈴は完全にそこに白球をコントロールしてみせた。これは何かの奇跡なんだろうか。美鈴と一緒に僕まで目を輝かせて、僕達はキャッチボールに興じてしまった。

しばらくすると、後ろから誰かに頭を叩かれた。美鈴はきよとんとしながらその様子を見る。美鈴の表情から察すると、見知った人ようだった。誰だろう。

「一体あんたは何時まで遊んでるの！一体今何時だと思ってるの。小学生じゃあるまいし」

母だった。公園の時計はもう七時を廻っている。道理で暗くてボールがよく見にくいと思った。公園の外灯に照らされた環境、雪はない。五時過ぎから始めたキャッチボールは、とんだ長丁場になってしまっていたらしい。しかも、最後の一時間は、もしかしたら休憩もまともに取らなかつたんじゃないか。大変なことをしてしまった。美鈴は、大丈夫だっただろうか。僕が興奮して取り乱していたから、飽きたとも、辛いとも、言えなかつたんじゃないだろうか。小言を言う母のことは無視して、僕は美鈴を見る。息は荒くなっているけれど、

「和真。もう終わりか？」

そうやって笑顔で聞いてくる美鈴を見て、僕は安堵した。

「うん。美鈴。今日はもうおしまい。また明日にしよう」

そう僕が言うと、

「わかった！ また明日だな。わかった！」

元気にポニーテイルを揺らし、言った。

突然後ろから首根っこを掴まれ、

「もう、あんたがこんなに子どもだなんて思いもしなかった。野球は小学校までだって、自分で言ってたじゃないの。まったく！」

そんな風に怒鳴られる僕は、正直悪いとは思ったけれど、そんな言葉をすべて無視した。

今は、ただ美鈴が投げる球を、見ていたい、捕っていたいと思うだけだった。それが一体何になるのか、今一番の問題の新しい答えに繋がるか、とか、ただ単に逃げ出せるという思いがするのか、皆目見当なんてつかない。

ただ、一つだけ言えることといえば、美鈴が投げるその球を捕る、ただそれだけのことに對して僕は異様なまでに興奮し、楽しんでいった。ただ、本当にそれだけだった。

第2話 僕たちのキャッチボール

僕だけじゃなく、普通の中学生にとって毎日っていうのは、繰り返しの単純作業だ。全てが同じように繰り返される。順番や種類が違うだけの授業と諸々のイベント。僕は学校で行われるそういったものに一切興味が持てなくなってしまった。そもそも、楽しいなんて入学当初から思った試しもないけれど。

そこに大きな変化として現れたのは精々キャッチボールだけだ。美鈴と一緒にやるあのウインドミルを受けることだけだ。

始めた当初こそ僕は本当に興奮して、凄いとばかり思っていた。だって美鈴とのキャッチボールが後半に差し掛かると、男子でなおかつ野球経験がある僕でさえも取りこぼしてしまうような豪速球を投げてるのだ。取り続けていると、グローブ越しの手が痛くなってくる。痛いのを我慢していると、一回だけ本当に手が赤く、腫れたんじゃないかという状態になったくらいだ。本気で驚いたし、あの日以上に興奮したりもした。

だけど、それも繰り返していけば結局は日常。キャッチボールをすること自体が作業に変わります。何せ、やれば美鈴は喜ぶから。美鈴だけはハイテンションになれるから。だからやる。……それだけ。

つまりは、飽きたということでもある訳だけど、ここ一週間くらい帰宅後すぐに、美鈴によって休む間もなくキャッチボールに駆り出される日が続いたのだ。土日なんかは半日とかそれ以上と言っても良いくらい。いい加減飽きないかな、もう勘弁してほしいと、僕はそう思い始めてすらいた。

けど、しょうがない。美鈴は飽き性だけど、一度はまるとやめられない性格だから、とことん付き合っただけよう。そうするしかない。そうするしかないから。

僕は小学生の時にやっていた野球のお陰か体力にはそれなりに自

信があった。中学校で帰宅部になって運動をまともにやらなくなつてしまつたけれど、いわゆる貯金つていうものだろうか。小学生の時に鍛えたものは今でも残っている。

放課後、僕が中学校から小学校の敷地内に入り美鈴と二人で帰ることはもはやクラスメートをはじめとした学校関係の人間にとつて日常になつていて、誰もそれを気に留めることもしないし、興味自体を失つてしまつていようだった。僕の昔からの知り合いも、こうして美鈴と二人で歩いている僕に対し、言葉をかけるようなことはなかった。そもそも、そいつらは僕が小学生の時に所属していた少年野球チームのメンバーであつたというだけで、僕と本当に仲の良い者など一人としていなかったのだから当然だ。

でも、そんな彼らは、クラスメートは、僕たちがいないところで、そして僕が一人でいる時にも、わざと聞こえるように堂々と悪口を言う。腹立たしい、それは、本当に腹立たしいことだった。

こいつらの態度は、まるで興味も無く、しかもおもしろくもないと分かっている三文ドラマを見ながら、

おもしろくない、とか演じてる人、マジで芝居ヘタ。大根じゃん？ そんな風と言う人のそれと同じだ。興味も無いくせに、本気で僕たちを見ようとしなくせに。接しようとしなくせに。

そう思う度、僕は腹が立って仕方が無かつた。

学校は、本当におもしろくもなんと無く、ただただ苦痛だ。担任も。何がそんなにおもしろいのか、ゲラゲラと笑うクラスメートも。全部不快だ。

つまらないことばかりで、僕は授業中でさえも学ランのポケットの中にある野球ボールを指でこねくり回し、美鈴のことを、……正しくは、美鈴の投げる球のことを、考えてしまう。そっちの方が難しく、有意義だと思えるから。

何故、上投げでも下投げでもコントロールの良くなかつた美鈴が、ウインドミルにした瞬間にコントロールが良くなつたのか。

何故、テレビで見ただけのフォームを見よう見まねで実行しただ

けで、あんなに速い球が放れたのか。

何故、美鈴は投げるだけ、という行為に、あれだけのこだわりを突然もつようになったのか。

黒板に書き連ねられるどんな科目の問題なんかより、美鈴に関して僕の頭の中に書き連ねられた疑問の方が、ずっとずっと、難しく。解けなくて。僕は答えが出ないまま、それでも考え続けながら美鈴を迎えに行つて、玄関入つてすぐの所に置いてある僕たちの道具をすぐに手に取りまた公園へと走っていく。どこかの小学生みただな、と僕は毎日思う。でも、それが美鈴の思うことなら、望むことなら、そういう幼い生活が続くことも何かしら意味があるんだと僕は僕に言い聞かせていた。

キャッチボールを終わらせて家に帰ると、母が玄関の前に立っていた。

「ただいまー！」

何も考えず、元気の良い声で母に抱きつく美鈴を横目に捉えながら僕は、ただいま。と母に声をかけた。うん。おかえり。母の返事はただそれだけで、何も変わったところは見られなかった。

「何でここにいるのさ」

と僕が聞くと、

「つい今さっきまでお客さんがいらしてたの。お見送りよ。タッチの差だったしお客さんの帰り道はあんた達とは逆だったから見てないでしょうけどね」

とだけ説明してくれた。だけど、

「お客つて誰だ？」

という美鈴の問いかけには、

「二人も知っている人よ。誰かつていうのは内緒」

とはぐらかしてきた。僕が追及する前に美鈴が母に食い下がったけれど、やれその方が面白いでしょ、だの、やれ大人の話に首を突っ込まないの、だのとまた適当なことを口にしては家に入り即座に

夕食の準備に入ってしまった。

こうなるとあまり話しかけることはできない。母はあまり集中している時に話しかけられることを好まない。知っている人であることはわかっても、それ以外には何ら情報が与えられなかったが、それはつまり、僕たちには知られたくないことについて会話していたと考えても良いということだろうか。

……大人は、結局そういう存在だ。知られて困ることを、隠しておせているつもりにでもなっているのか？

殊に母はそういう内緒を、僕が小さい頃からいくつも作り出してきたし、今も美鈴や僕に対してそうしている。そうして僕が、母に対して不信感を募らせていることに、母は気付いているのだろうか？

僕は不信を源とした不満をまた一つ、募らせることになった。

そのまま美鈴を連れて部屋に入ろうとした時、母が不意に僕を呼び止めた。

「……何さ」

不機嫌な顔をしたまま僕は母の元に近づく。そして母の手に握られている物に目をやる。

母の手に握られていたもの、それは母のあまり大きくない手で握るには苦労するようなサイズのボール、ソフトボール用のボールだった。母はそれを僕に手渡すと、

「さっきのお客さんが和真につて」

それだけを言つて、また夕食の準備に戻ってしまった。今日はカレーだろうか。火に掛けられた鍋がコトコトと音をたてている。美鈴が好きなものもあるが、これを一度作ってしまったら2、3日家事が楽になる。そんな魂胆で作ったのが見え見えで、僕はそんな母がまた嫌に思ってしまった。

部屋に入ると僕はすぐに母から受け取ったボールをお手玉でもするように上へ放つては取り、放つては取りしていた。美鈴が興味津々といった様子で僕からボールを掠め取り、

「でけー！」

と叫んで迷わずそれを壁に向かい、ご丁寧に全力投球のウインドミルで投げつけようとする。

「だー！」

僕はそれを体を張って止めた。ただでさえ考え事をしている最中でイライラしていたから、僕は美鈴を睨みつけてしまった。

それを見た美鈴が怯えた顔をしたことで、僕はああ、しまった、と思った。いつも一緒にいて、いつも同年代以上の身体能力をまざまざと見せ付けられていたから、忘れてしまうことがあるけれど、今の美鈴は同年代の人間に限れば僕にしか心を開けないし、大人にだって、僕の母のように限られた人にしか彼女は心を開けない、精神状態が普通ではないんだ。僕は、すぐに顔についた何かを振り落とすように首を左右に振って、できる限り穏やかな表情を作ったから、美鈴に言う。

それはまるで、お兄ちゃんが悪いことをした妹にそれはいけないことだと教えるように

「美鈴、明日になったらこのボールを使ってキャッチボールしようね」

できる限り穏やかに、美鈴の目を見て伝えた。そうすると、美鈴はさっきの僕の睨みがあったためか、うん、とか細く答えて首を小さく振るだけだった。

昔、僕が美鈴を睨んだり、怒って叩いたりしようものなら、何か文句でもあるのか！ だとか、和真のくせに生意気だ！ とか、そんな怒声と一緒に容赦なくハイキックやとび蹴りを食らわされて、僕は泣かされてばかりだった。それが今や何なのだろう。睨んだだけで今の美鈴は泣きそうになる。僕は今150？。体重も学年の平均以下。睨んだり、凄んだりしてみても、男子どころか、女子も小学生も怖がったりしない。それでも、美鈴だけは恐怖する。

僕は何故美鈴が恐がるかを知っている

……でも、理由を知っていても、救いになど、なるものか。

ソフトボール用のボールを片手でお手玉しながら、僕は何のやる

気もおこらないまま、ベッドに体を沈めていた。

そこでボールをいじっている時に気付いて呟いた。……このボール、鎌原中のだ。

それを聞いた美鈴がうん？ とこつちを見たので、僕はいや、独り言だよ。ただそれだけ言って、僕はまたそのボールを見始めた。

鎌原中だけではないだろうが、野球部、テニス部、卓球部、バレー部、そして、ソフト部は、ボールを盗まれたり、もしくは紛失してしまったりということが起きる。もしも学校内で何かしらのボールが見つかった時に、それが鎌原中の物だとすぐに分かるよう、ボールには鎌原中の校章 上向きと下向きの三角形が組み合わさっている、見かけは六角形に見えなくも無く、そしてその中に鎌原と書かれている の印が押されているのだ。

そして、このボール。うっすらとではあるけれど、確かに見かけが六角形で、原の字だけとりあえず読み取れる。確かにこれは、鎌原中のソフト部が使う、ソフトボールだ。

ここでまたさらに疑問が増えた。母のお客さんはこれを何故ソフト部と何の関係もない僕や美鈴に渡した？ 鎌原中に返して欲しい？

……おかしい。だったら、中学校の近くを通った時にでも、グラウンドに投げ込めば、いずれ誰かが拾うだろうに。

もしかすると。僕は思った。だけど、まさか。僕はその考えを自分の中で打ち消した。非現実的だと思ったから。丁度その時、僕は目の前で手がブンブン振られているのに気付いて、その手の持ち主、美鈴の方へ体を起こして向けた。

「どうしたの？ ご飯はまだだよ」

僕が言うと、美鈴はつまらなさそうな顔をしながら、違う。そうじゃない。そう言った。

「また何か和真は難しいこと考えているな、と思って」

美鈴の声が続いて僕は、

「うん。……ごめん。もう大体考えはまとまったから、もう大丈夫だよ」

そう言った。

「そうか。ならよかった。……てっきり私は和真がそのでかいボールと無言で通信して愛を確かめ合っているのかと思って心配していたんだ」

……それはないよ。……うん。絶対に。

僕はソフトボールを学ランのポケットに入っていた野球ボールと入れ替える形で直し、明日の準備をする。準備が終わったのとはほぼ同時に、母が晩御飯だと僕と美鈴を呼んだ。

夕食は、やはりカレーライスで、それはいつもどおりの味だった。おいしい、おいしいと笑顔で食べる美鈴をよそに、僕は母が全く教えてくれないお客さんのことや、ソフトボールに込められているメッセージの解釈のことばかりを考えていて、

「今日のカレーライス、おいしい？」

という母の問いかけにも、うん、という生返事を繰り返すだけだった。

一番有り得ないと考えた可能性。非現実的だと思った考え。僕と美鈴がキャッチボールをしていることを知っていて、そして恐らく僕と美鈴のキャッチボールを最低一度は見ている。そうでなければ、ソフトボールをお土産として渡すことなど、有り得ない。ボールは、校外のどこかで拾った？ それとも……。

夕食を腹八分で食べ終えた後、食器類をキッチンまで運んでからすぐに僕は課題に取り掛かる。それを十分かからない内に完了させてから、僕はまた学ランのポケットにあるソフトボールとにらめっこを開始する。まだ、何か考えの助けになるものがないかどうかを、調べるために。

「やっぱり、愛の通信をしているのか？」

……いや、だから違うんだってば……。

それから美鈴はお風呂に入り、寝巻きに替えてから防寒具と防寒着を身に付けて、家路につく。この家の隣の、荒れ果てた廃屋に。「美鈴だけでもこの家にいないか？」

そう僕や両親が美鈴を説得しても、彼女は決して首を縦に振らなかつた。

「そういうところは醍醐譲りだ」

と、父が言っていたのを、思い出す。美鈴の父親は、確かに頑固な人だった。それが美鈴に受け継がれて、そしてその美鈴がその性分のせいで苦労しているのを見ると、僕はやっぱり悲しくなるのだ。

キャッチボールをするようになってから美鈴が言えるようになってた言葉。

「おやすみ、また明日」

か細い、北風に負けてしまいそうなその声に、僕もできる限り、美鈴に確かに届くように、聞こえるように答える。

「うん。……おやすみ、また明日」

第3話 校内放送と特異の人

僕と美鈴がキャッチボールを始めてもうどのぐらい経っただろうか。一月が終わっても随分経つ。一月は、行く。そんな言葉をよく聞くけれど、そんな調子で二月は逃げて、三月は去っていくんだろっか。

僕と美鈴はほぼ毎日キャッチボールを続けていた。晴れていても、雪が降っても、基本的に美鈴が疲れたと言っか、僕の手が痛くて耐えられなくなるか、二人で決めた時間 大体始めてから一時間程度 続けてから、帰るとというのが僕たちの定番メニューになっていた。

そんな中で、美鈴に変化があつた。昨日の夜のようにおやすみと言えるようになったこと。そして、朝。

「……今日も、行くんだよな」

「……うん。じゃあ、行こうか。美鈴」

学校へと、美鈴があれほど恐がり、嫌がっていた学校へと、やはり明るい表情ではないものの、大分渋る時間もなくなっていくようになったこと。

この二点は、キャッチボールを始めてからの短い期間において、ほんの少し、少しだけだけど、美鈴が回復したことを僕たちに教えてくれた。父も、母も、喜んだ。これに、美鈴の両親も加われば、もつと良かったのに。

美鈴の父親はまるで死んだようにいすに座っているだけで、そして母親は、既に家にもいない、というか、この町にもういない。

あの日から数日して、美鈴の母親は出て行った。一方的に離婚して、周囲の家どころか、僕の両親にさえまともに挨拶をせずに、出て行った。

父がこんなはずじゃ、なかったんだけどな。そう言って、そしてそのすぐ後に母に咎められて、本当にばつが悪そうな顔をしていた

ことを、美鈴が毎日夜と朝を迎える廃屋を見る度に思い出す。

……本当に、この廃屋には、厭な思い出しが存在しない。思えば、それは当然のことで、美鈴にあの日が来て、そして両親が壊れ始めて、美鈴が壊れて、最後に家が壊れた。壊れた日々の積み重ねがこの廃屋なのだから、この象徴に、ネガティブなイメージしか抱けないことは、極々当たり前のことなんだ。

「……和真。……がっこう、行かないのか？」

「……ん。……行こうか。学校」

朝方、今日も細かい雪がちらついている。僕たちの声が小さくか細いのは、寒いからであつて欲しい。空は今日も雲の灰に満たされてはいるけれど、折角の一日の始まりじゃないか。……朝方から気分が塞ぎこんで、希望が持てないことが今の僕たちの声に現れます、なんて、……悲しすぎるじゃないか。

僕は考えを少し変えようか、とも思いながら、それでも何故か明るく、楽しいことを考える気にはどうしてもなれず、結局僕は僕たちのこととか、両親のことを考えながら歩いてきた。

僕と美鈴の両親の四人は、大学の同期で、全員が同じ建築を学ぶ人間だったという。頭の良さも父が一步リードしていたくらいで、ほぼ五分五分という、互いのプライドも、理性も刺激しない、マイルドな関係であったという。そしてその四人の中でも、僕の両親と美鈴の両親は不思議と二人きりであることが多かったと聞く。だからこそ、そんな二人ずつで夫婦になって、そしてそこに子ども、即ち僕と美鈴が生まれたことは、極々自然であると思う。

あと、大学では、あと二人仲良くしていた人がいたそうだが、その二人は四人と学部が違っていたから、講義なんかで一緒になつていた訳ではなかったと父が少し前に教えてくれた。

その内の一人は医学部を主席で卒業し、今もこの町の診療所で医者をしている。僕も小さい頃から診てもらっているお医者さんだ。でも実は隣町にあたる宮ノ訪町で一番大きな病院の院長の一人息

子で、将来はそこを継ぐのだろうということだった。

もう一人は教育学部を主席で卒業した人だそうだが、あまりにも周囲を唾然とさせる人間性が祟って、報復人事の対象になり、孤島に飛ばされたり、特別支援学校に飛ばされたり、とかく良い目には合わない損な教師をしているという。父はこの人のことを内心良く思っていないようだったけれど、常識にうるさい父からすれば、なるほどそれは確かに、と僕は思う。

……それと比較すれば、僕たちの両親は、皆平々凡々だと僕も思う。主席などではなかったが、もちろん卒業が危ぶまれるほどの劣等学生でもなく、父は建築デザインの会社に無事に就職して、今やそれ相応のポストに就いている。それは母が働かなくとも僕や美鈴の食事代やら何やらを賄えるほどの今の生活を見ても明らかだ。

一方、美鈴の父親は建築の現場に拘るために、何のために大学を出たかわからない。という周囲の反対を押し切り、現場を取り仕切る仕事に就いた。稼ぎが僕の父ほど良かったわけではもちろんなく、美鈴の母親がパートに出たりすることもあった。それでも、美鈴は家が隣であった僕の家に来て、僕と遊ぶことによって、そして、時たまに二つの家族が揃って旅行をしたり、食事をしたり、そんな風に過ごして助け合っていたんだ。

だけど、僕と僕の両親が見ている目の前で、美鈴の家は、大河家は、崩れ去ってしまった。

僕は前の僕達のことを、少なくとも今よりも満たされていた時期のことを、どこか遠くの出来事、みたく感じる時さえもあるけれど、父や母は、そして美鈴の両親の気持ちは、どうなのだろう。……本当に。

こんなはずじゃなかった。父は母から咎められても、繰り返し、繰り返しそうやって言うのだ。……それくらい、無念だって、思っているのは簡単にわかるんだ。

そういう風に思った丁度その時に、僕と美鈴は小学校の校門の前に着いた。周囲は背中にランドセルを背負い、学生服の僕と私服だ

けどランドセルなど背負っていない美鈴を、明らかに浮いている僕達を不思議そうな顔をして見つめながら通り過ぎる小学生ばかり。……中には、僕と美鈴のことを知っていて、もはや興味の対象にもならない、という顔をして通り過ぎる者もいる。

それぞれの教室では、美鈴のことは既に話がしてある、と特別支援教室の先生は言っていた。その美鈴を連れてくる学生服の人つまり僕 のことも、ある程度話がなされているのだろう。僕と美鈴に話しかけてくる子なんか、いない。

ただ、その代わりに、

「あのお兄ちゃんたちが先生の言ってた人達？」

という低学年の子の声や、

「うっわー。ラブラブじゃん。キッモー！」

という中学年、高学年の声が耳に入る。……たまらなく不愉快な気持ちになるけれど、それは仕方の無いことだから、聞き流してほしい。それがその先生から重々言い聞かされた言葉だ。僕は美鈴の手を引いて、特別支援教室へと向かっていく。

「よろしくお願いします」

僕が先生にそう伝えると、先生も、はい。いつてらっしゃい。そう言っ僕を送り出した。

中学校の自分の教室、自分の席に着けば、周囲の環境は僕から切り離される。いいや、僕に話しかけてくる人が全くいない訳じゃないし、僕もクラスの人間に全く触れないわけじゃない。

だけど、僕はあの日以来誰とも積極的に関わろうとしないし、そしてその誰もが、僕と深い関わり それは僕のこんな本音を知ることや、美鈴のことを同情や憐れみでない感情で見ること を持つとうなどとはしなかった。それはもちろん、担任の石田もそうだ。あの人は、あの日以前にも存在していた問題から、今でも、目を逸らし続けている。

それがこのクラスの答えだ。間違っけていても、日常は進むし、日常に解き直しはない。第一、今からそんな問題に向き合ったって、

何も僕が望むようには、動かない。

だから、僕は周りの環境から切り離され、そして僕も周りの環境を切り離すことを選んだ。……その言い方が適切でないなら、僕は壁を作ったのだ。その壁は、可塑性だ。僕は仏頂面で、無表情のまま、鞆の荷物を机に入れ込んでいく。

そんな調子で石田のHRを終え、一限、二限、三限と過ごし、昼になったって、僕の周囲に立ち並ぶ壁は消えることなんて無くて、でも、まるで僕の方が空気になっていくみたいに溶けてゆく。僕がいるけど僕がいない教室、そこには、僕がこのクラスに持つ強い不信が、どす黒く存在する。

ただ、そういう風にして学校でのほとんどの時間を一人で過ごしている内、たまに考えてしまう。一体僕は、何を信じているのだろうか、と。

母親に不信を抱き、学校に不信を抱き、石田にも、クラスメートにも、僕は信頼の一縷でさえも寄せてはいない。父親も、仕事はできて僕や美鈴の変化に、気付けなかった。美鈴の両親は、今の美鈴を見ていない。……最低だ。本当に、最低だ。

じゃあ、そんな風に人を値踏みしてる自分は？

僕は自分のことを完璧超人などと勘違いしてはいないつもりだ。でも、本当は、僕はある人達を、見下してはいないか？ ……単なる、ガキじゃ、ないのか？ 僕は結局、僕の中で僕に対する不信を溶かすことが出来ないまま毎日を過ごしていた。

六限目を終えて、HRが終わる頃だった。何の目新しさも、新鮮さも無い日常が、今日もこれでほとんど終わる。美鈴はソフトボールに変わっても、ウインドミルで完璧に球を放れるだろうか？ 日常を崩してくれる要素が、そんなところにか見つけられないのは、中学生の日々としては妙に滑稽であると感じたのと同時に、何かし

ら崩す要素があることだけでも、幸運なのではないか、という諦めの感情が、石田の小言が漂う教室の中で僕の思考を支配していたのだった。

その時、ブツ！ という校内放送の電源スイッチが入ったのを示すノイズが、僕の耳に届いた。微妙な音量だったけれど、石田を含めたクラスメートのほとんどが、気付かなかったようだった。しかし、僕の耳には、何故か妙にハッキリと聞き取れた。

思考がそのノイズによって掻き消された後、僕はその校内放送の内容の方に意識が傾いた。今日は、といいつつ基本いつも僕は思考が暗く陰鬱だから、それが逸れることは、美鈴を迎えに行つてキャッチボールをするしかない僕にとっては、幸運なことだった。……しかし。

「びんぼんばんぼーん！」

校内放送をしている人間が自分の口でそう言ったのが聞こえた瞬間。クラス中が冷めた空気に包まれたのを僕は感じた。生徒の単なる悪戯であれば、問題はなかっただろう。……説教を食らって、おとなしく反省文でも書いてれば良い。

だがしかし、声色から明らかに教師の内の誰かだということが僕にもわかる。チツ！ 石田の舌打ちが聞こえる。声で、すぐに誰か分かったということだろう。その後、しばらくしてから、

「えーつと……ウケた？」

と質問をしだす始末に、教室からはくすくすと笑い声が聞こえだす。僕も正直この先生の真意がわからない。

「それじゃ、本題に入りますね。えーつと……あ、そうそう」

本題の方が重要なはずなのに、それを忘れてしまいそうになっていたことが露呈される。本当に大丈夫なのか。

「一年一組の瀧中^{よしなかつま}和真君。一年一組の瀧中^{よしなかつま}和真君」

その瞬間。クラス中の目という目全てが、僕の方を向いた。正直、僕はこの声の主のことをまともには知らない。会話なんて、したこともないんじゃないか。……何故僕の名前が呼ばれたのかわからずに困惑していると、

「帰りのHR終了後、すぐに僕の所まで来てください。繰り返しします」

もうこの時点でくすくす笑いが所々で起こっている。

「帰りのHR終了後、直ちに、直ちに僕の所ま……」

ここで一回放送が止まる。

「……ってオイオイ。僕のところって言われてもわからんつちゅーねん！ なあ！ あっはっはっははははははははははははははははは……ゲホツゲホツ！」

なぜか一人で馬鹿ウケしてしかも咽ている！

「なあ、お前、あんなのと知り合いなのか？」

と僕の後ろに座る男子が質問してくる。僕は無言のまま、首を必死に横に振ってそれを否定する。わかってくれたのか、すぐに興味をなくしたようにして、彼は席に座りなおす。

「あー。あー。……失礼いたしました。一年一組、瀧中君。HRが終わったら、生徒指導室の百合神のところまで、お願い致します。それじゃあ、大変お騒がせ致しました！」

無駄に元気の良い切り方で放送を終わらせたその声の主は生徒指導の百合神ゆしがみ昇先生のぼる。

何を考えているのかよくわからないような先生で、一学期が終わる前、夏休み前の生徒指導の先生の話では、ものの見事にステージのど真ん中で転び、全校生徒の笑いを誘っていた。皆が気付いていたかどうかは分からないけれど、あれは明らかにわざとやるんでいた。ウケ狙いのつもりだろうか。僕はそれが気に食わなかった。

話も開口一番ひどかった。

「ちーっす。オラ、のぼる！ 皆、元気かあ？」

……そこから始まる与太話は、皆の笑いは誘ったが、正直タメにはならなかった記憶がある。僕は先生の最初のコケで興味を削がれ、正直その後何を話していたのかも、よく聞いていなかった。

後から聞いた話ではあるけれど

「深夜のゲーセン、深夜のファミレス。良いでしょう。私とことんお付き合いいたします。そんなお方々には、私と一緒に補導という名のデートが待っております！」

正直お断りだ。大体、教師と一緒にそんな風に時間を過ごすなんて、吐き気がする。

権力を振りかざすだけの生徒指導教員というのは大嫌いだけれど、ああいうタイプの教師も、苦手だし、嫌いだ。

何で呼ばれたのだろう。そんな風に思い、僕は美鈴のことを考えていた。キャッチボールを始めてから、小学校では先生との会話が少しかけ弾むようになり、帰りの時にも、恐怖に満ちた顔が、少しではあっても、明らかに和らいでいるのを僕は感じていた。そんな美鈴を長く待たせるのも、本気で気が退ける。訳の分からぬ教師の言葉など、無視してしまえば良い。反省文くらいなら、別に構いやしなくたって、大丈夫だろう。その時だった。

普段、僕の隣に座っている女子生徒が小声で僕に、

「百合神先生の所にさ、行ってみなよ。良い先生だったから」

と笑顔で言ってきた。髪の毛の長さももちろん色も、服装も、人への接し方も問題がない彼女が、何故生徒指導の教師と話をし、そして何故、良い先生だとわかるのか。疑問を感じただけけれど、もう今更無視してしまうこともできない。

……面倒だ。僕は、そう吐き捨てるような感情を、

「うん。行こうかな」

という言葉と、当たり障りの無い笑顔というポーズに隠し、そして学校の最上階にある生徒指導室へと向かったのだった。

僕は学校の最上階、生徒指導室のドアを拳で叩き、失礼します。

そう言おうとして、言えなかった。

「しつれ」

まで言った所で、

「ウエルダーン！……あつ違う。えー。……ウエルカーム！」

そんな風に浴びせられた大声に、僕の声は掻き消された。……本当に、何ていう人なんだろうか。

ぼかんと、というか啞然とした僕の顔を見ているのかいないのか、とにかく僕を無視したまま、目の前の大男は続ける。

「ま、それよりお茶なんかどう？　おいしいお茶を飲みましょう。

おごりだよ？」

笑顔で聞いてくる大男に対して、僕は明らかに敵意を持った目で睨みつける。

「ハイ、お茶。安心してよ。変なの盛ったりしてないからさ。おいしいよ？　お茶請けもあるよ？　どうぞ！」

僕の視線になんか一切意識を傾けていないのである。この大男はそんなことを言いながら水筒からお茶をコップに汲んで僕の前に差し出す。でも、僕はのんびりとはしていられない。美鈴が待っている。

「……先生。まともな話がないのなら、僕は帰ります。……人を待たせています」

「うん。知ってる」

先生は笑顔のまま、言った。そして、

「じゃあ、その、待っている人について話をしよう、か」

笑顔は崩れない。そのままの顔で、先生は声だけを厳かに、僕に言った。

この人……、どれだけ知っているっていうんだろう。僕はこの部屋に入った直後とは全く違う緊張感を持ってこの男と向き合った。僕の目を見た男は僕に言う。その時の声は、またいつものおどけた調子の、妙に僕を腹立たしくさせるものに戻っていた。

「何、安心してくれや。別に取って食おうなんて思っているわけじ

やない。今日ここに来てもらったのも、聞きたいことが二つ、あるだけなんだからさ」

ピースサインを作りそれを僕に向けながらこの男、百合神は言った。

下手な話だけは、禁物だ。僕は強く思った。一体この人が何をしようとしているのか、何がしたいのか、それは分からないが、ぽつと出のこんな人に、僕と美鈴の問題をかき乱されたくない。

さあ、何を言ってくる？ 何を、聞いてくる？ 僕は緊張して思わず身構えていた。……だけど、そんな僕に対する百合神の行動は意外なもので、何も言わず、何も聞かずに、お茶を飲み干して、よっこいせ。それだけを口にして、とつと部屋から出て行ってしまふのだ。

呆気に取られた僕はその場に硬直していた。百合神が部屋を出て、そしてすぐに戻ってきて、

「ほら。早く行かなきゃ。美鈴さんが待っているよ」

そう言うまで、僕は固まっていた。

はっとした僕は、急いで百合神を追い越して靴箱に急いだ。

「いやいやいや。走らないですよ。廊下は歩こうよ。ってゆーか、僕は走るのが嫌いなんだって」

焦った顔をしてどたどたと走って追いついてきた百合神に対して僕は、

「……だから先生は太ってるんですね」

そう嫌味つたらしく意識して言った。百合神はその言葉に対して特別な感情など持っていない、という風な顔で、

「……キツイなあ。君は」

と笑ったまま、顔にかいた汗を腕で拭いながら言った。

そうこうしているうちに、僕は美鈴が待つ、鎌原小の特別支援教室前の土間までやってきていた。百合神をまくことよりも、今は美鈴を早く迎えに行くべきだと考えた僕だったけれど、いつの間にか

あの男は僕を追いかけるのを諦めたのだろうか。僕の目が届く範囲にはいなくなっていた。

「……遅すぎるんじゃない！ このぼけーっ！ 更にアホウ！」

美鈴の目に付く所へと辿り着いた僕に対する美鈴の第一声はこの絶叫と飛び膝蹴りだった。飛び膝はともかく、叫ぶことに関してはあの日以来、全く出来なかったことなのだから、良い傾向だと僕は思う。ただ、この美鈴の絶叫と同時に気付くのは、その目一杯に、涙がたまっていること。

……寂しかっただろう。一人ぼっちになってしまった時間は、いくら定期的に先生が見てくれていたとしてもやはり、寂しかったろうし、辛かったと思う。僕を殴り続ける美鈴の攻撃を受け続けて、ごめん、と何度もなだめるように繰り返して、ようやく美鈴は静まるんだ。

僕が遅れると、こうなってしまう。こうなってしまうと、美鈴のテンションは下がっていく。落ちていく。僕は、そんな美鈴を見ると、……辛くなる。ああ、今日もこんな風になるんだ。キャッチボールを始めてからは初めてだな、今日は、できるのかな。今日くらいは休んでも、良いのかな。

そんな風に思っけれど、でもそれと同時に僕は百合神のことを思い出してしまう。今日僕が遅れてしまったその原因に思いがいつてしまう。腹立たしくなる。腹立たしい！ クソ！ あいつの所為で！ あいつの所為でこんなことになってしまった！ 僕は後ろを振り返って、土間の砂を蹴り上げた。これが八つ当たりなのはわかっていた。けれど、止められなかった。

「何か腹立たしいことでもあったのかい？ 和真君」

そんな声が急に聞こえた。僕と美鈴から、大体二、三メートル。そこにあの大男がいた。途中から歩いてわざとタイミングをずらしていたのか。

美鈴はびくつと体を震わせ、僕の後ろに隠れてしまう。こういった態度を取るの、初対面の人間と目が合ってしまった時。

百合神の方は、全校集会なんかで見せるいつものニコニコした癩に障る笑顔や、身振り手振りを交えて、近づいていることを悟らせまいとしながら近づいていた。

だが、美鈴はそれを見抜き、いつでも後ろに逃げられるように体の準備をしていた。僕を後ろの方に引つ張り、一緒に後ろに移動する。

その瞬間。男はそこにしゃがんだ。というより、そこにあくらを掻いた。

「……こんにちは。大河美鈴さん」

出来る限り美鈴を怖がらせないように、ゆっくりと、穏やかな声。そしてにこにここと笑うその顔で、美鈴に話しかける。

「……………」

威嚇するような美鈴の目を見据え、それでもこの男は引かない。

僕は思う。……いい加減、悟れば良い。部外者でしかないあんだに、何も出来るはずがないのだ、と。

だけど、呆れることにこの男は

「こんにちは。僕は、百合神 昇といいます。よろしくね」

と、美鈴と何らかの接触を試みることを、諦めることはなかった。僕は、この男の、何か、ができるかも知れない、なんていう甘ったれな考えが溢れている行動に、ほとほと嫌気がさしていた。

百合神は、美鈴に対して何かしら気をひこうとでも考えたのか、自分のポケットから一口サイズのグミ 鎌原小、中学校の目の前にある駄菓子屋に売っている十円グミだ を取り出した。僕は軽はずみに食べ物から人に取り入る手段をとる百合神のことがなお一層嫌いになったのだが、美鈴は違ったようだった。美鈴はグミに目が無い。……もっとというと、グミだけでなく、駄菓子全般、甘いものに嫌いなものはない。ということ、美鈴はそれに、手を伸ばしてしまう。

百合神は、今いるところからでは美鈴の手が届かないから、と僕と美鈴に接近してくる。そして、ある程度接近して、百合神が手を

伸ばしたその時、

「……………あ」

百合神がボソリと呟いたのが聞こえた。その顔は、自分のしでかした失敗に本気で戸惑ってしまった焦りと、悔恨に満ちているように感じられた。

……………百合神の手は、傷だらけだった。どこでどのような生活を送れば、そのような傷痕がつくというのか甚だ疑問に思えるような火傷や、切り傷にまみれた手だった。それは、右も、左も同じだった。それを見た美鈴は、折角僕の横くらいにまで身を乗り出していたのを、ガバリと戻ってしまい、僕が背負う鞆と制服を強く握り締めた。……………完全に怖がってしまったている。

もう無理だ。あんた、もう帰れよ。僕は、思わずそう言おうとしてしまった。

「なんてこった……………。失敗……………したなあ……………」

グミをポケットに収め、その両手を見つめながら、男は呻くように顔を落とし、言った。しかし、それでもすぐに立ち直った様子で、「でも、これでとりあえず顔と名前だけは覚えてもらえた、かな？」

そう言って、百合神は腰を上げた。こちらは、身の引き際は、理解しているでも考えれば良いのだろうか。

「ん。それじゃ、和真君、それに美鈴さん。また、明日」

そんな言葉をまた笑顔で言って、そして二、三歩歩いたところで足が絡まり、こけた。

……………これも、どうせわざとだ。芝居でしか、ない。僕にはあまりにも白々しく見えて腹立たしかったけれど、

「はは。あはははははは！」

そうやって、手を叩いて大笑いしている美鈴に、それを教えるのは何故だか気が引けて、僕は押し黙ったまま、男が勝手に起き上がって立ち去るのを見ているだけだった。

第4話 美鈴はとかく強がりだ

僕は百合神から開放されて学校から帰る途中、ポケットの中からソフトボール用の球を取り出して美鈴に見せた。それだけで、面白いように美鈴の目は見開かれ、輝きだす。

あいつのせいで無駄な時間を過ごしたからね。さあ、急ごう。美鈴！ そう言つて、ボールを持ったまま僕は走る。美鈴も、おー！ と叫び元気良く走り出した。そうだ、それで良い。誰にも、僕たちの時間を邪魔されてたまるもんか。

日常になつたキャッチボール、毎日繰り返すだけのキャッチボール。僕はこの日々特別な期待なんか持っていない。単なる日課だから。……でも、それが美鈴を楽しませ、僕の日常を適当に、丁度良く狂わせて。しかも、お互いに丁度良い暇つぶしになっているのだから、悪いことなど、何も無い。僕は部屋に鞆を置いて、学ランを脱いで道具を用意すると、美鈴の手を引いて、三丁頭公園、いつもの公園へと向かうんだ。

公園に着いてみて気付く。今日は、妙に人が多い。長方形の敷地内の中で、僕たちがやってきた方向にある、子ども達が遊ぶ遊具が大量に設置してある場所。そこに小学生にもならないくらいの子ども達がいるのは、至極当然だ。

だが、そこには何故か二人、僕が通う鎌原中の制服を着た女子生徒がいる。正直に言つて、ここは中学生が集まるような場所じゃない。簡単な待ち合わせ場所にはなっても、幼児が遊ぶような遊具とそれほど広くもない人工芝しかないこの公園は中学生にとって、あまりに暇な場所だ。なのに、そこには女子の中学生がいる。二人で、ブランコに隣り合つて座っている。ぎゅこ。ぎゅこ。古びた鎖の音が耳に入ってくる。

一人は教室で僕の隣に座っている女子生徒、小牧亜美こまきあみ 肩にか

かるか、かからないか、というくらいの短めの髪に、お気に入りなのだろうか、オレンジ色のリボンをよくつけている。無論、今もと、その隣には黒木杏奈くろき あんな　腰くらいまで伸びている長い黒髪を持つ、背の小さく、ほんのちよつとだけ丸みを帯びた体格をしている　だ。

二人はいつも、つていうわけでもないけれど、基本的に二人かもう一人仲の良い一人を加えた三人で行動している。小牧さんは僕達の家から近いが、黒木さんはこの近所に住んではいない。校区の端それも僕達とは間逆の方向だ。遠いところまで来たのだろうその証拠に、彼女の自転車　周囲にいる子どもが乗るには大きすぎるのがそう考えた証拠だ　が置かれていた。

……こんなところにまで、よくもまあ二人で来るよな……。僕は思った。二人は同じクラスで席も近い。そして昼休みだとか、放課後の部活でも一緒にソフト部で活動してるっていうのに、何故こんなにも長い時間一緒にいられるのだろう。流石にトイレにまで一緒には行かないことは僕も知っているが、それは僕　学校においてあの日以前でも常に壁を作っている人間　にとって実に奇異なことだに思えてならなかった。

そんな風に物思いに耽る僕を現実に戻すのは、やっぱり美鈴だった。

「おい！　とつととボールを私によこして座れ！」

「え？　あ、ごめん」

僕はそう言うと、美鈴に軽くボールを投げてから、丁度トイレの壁が僕の背中にくるように、座った。それは、もしもいつもと違う、慣れないボールで行うキャッチボールで、美鈴がまたノーコンに戻ってしまったても、ある程度の気休めとしてこの壁を使う為だ。

でも、それもまた杞憂で、美鈴の投げる球はいつも通り、寸分違わず僕がグローブを構えたところに収まる。それは、やはり投げさせる場所をやや意地悪なところに微調整させたとしても変わらない、僕からみれば完璧といえる程のコントロール。むしろ下手に野球に

慣れてしまっている僕の方が、慣れない大きなボールの扱いに困っていた。

美鈴の放る球は本当に速球だ。もしもきちんとした人の指導を受ければ、豪速球になるのかもしれない。単なる僕の場合に基づく力ではいけないけれど、今の美鈴の速球を受けている僕は、半分はやっぱりボールに不慣れなことが原因だろうけど、美鈴の投げる球を取りこぼしたりしないように、かなり神経を使っていた。

……ふと僕は美鈴に球を返す時に数歩前に出て公園の出入り口例の二人の自転車が置いてある場所を見た。

自転車はまだ置いてある。が、肝心の二人がいない。小牧さんとはもなく、黒木さんはここから歩きで家に向かうのはややきつい距離だ。二人で小牧さんの家に向かった可能性はあるけど、普通自転車を置いてはいかないだろう。

でも、美鈴を置いて二人を探したりする訳にもいかないし、そうする必要だってない。僕は考えを途中でやめて、またトイレの壁を背に、座った。

それからしばらくして、美鈴が汗をかき、球を投げる間隔が多少開き始めた時に僕は美鈴に休憩を持ちかけて、公園の中心に位置するベンチに座る。今の美鈴はキャッチボールをやめる時にはひどく反発するが、休憩の話には逆らわず、素直に休むようになった。そうした方が自分にとっても楽だと、気付いたのだろうか。

ところで、上投げの時には投げる球が全て暴投だったという状態だった美鈴が、ウインドミル投法になってからは一切していない。汗をかき、息が乱れるくらいに疲れてしまっても、そのコントロールは大きく崩れない。

そして何より、本来飽き性なところがある美鈴がほぼ毎日渡ってこの日課を繰り返している。……何故だろう。僕は美鈴を思わず見つめて、思った。もし美鈴にそれを聞いてしまったら、どうなるだろう。

理由なんてどうでもいいのんじゃアホウ！ と怒られ、蹴られるか、それとも、不意にその飽き性が顔を出して、キャッチボールをやめてしまっただろうか。……どちらにしても、僕は美鈴にそれを聞くことができなかった。

「さて、それじゃあもう一回始めようか」

「おう！」

僕は美鈴の手には少し大きなボールを手渡して、そして定位置に座る前にもう一度小牧さんと黒木さんの様子を伺ってみると、もう二人はいなくなってしまうていた。自転車も、もうなくなってしまうている。それを見てから僕は美鈴にそのことについて聞いてみた。呼びかけられた美鈴は、

「何だ？」

とだけ言っつて怪訝そうな顔をした。ここでさ、中学生っぽい人を見た？ 僕の質問には、

「いいや。見てない。……あたしは、投げる時にはお前とグローブしか見ないようにしてるから」

という返事をした。あまり興味のなさそうな返事に僕は、うん。

……そっか。だったら、いいや。ただそれだけを、笑顔で、何でも無いような問題だつていうことを強調するように言っつて構えた。

「……まあ、和真が良いなら良いけど、何か、ヘンじゃないか？」

……どうした？ 突然」

美鈴は発言と同時に速球を投げる。バシッ！ と気持ちの良い音がした。その音を聞いて、僕は美鈴に座つたままボールを投げ返す。変じゃないよ。大丈夫。そう言いながら。

まあ、それはそつだ。鎌原中の二人の女子生徒が偶然三丁頭公園にいた。ただ、それだけ。それだけのことで、何をここまで気にする必要があるというのか。美鈴は、投げる時でもそつでなくても僕のことを見ている。……不安にさせちゃ、ダメなんだ。

でも僕の頭の中でどうしても気になったことがあった。

そこではつとずる。でも、もう遅い。

美鈴の投げる球は、とにかく速球だ。慣れない大きな球が、僕のミットの中心から微妙に外れている。ここで集中を切らしていた僕には、それを修正できない。……結局ボールはグローブの縁に当たってからその勢いを失うこともなく僕の顔に向かってきて、そして鼻を見事に捉えた。

僕はうっ！ と声をあげて顔をグローブをはめたままの左手で覆う。やってしまった……。う。

グローブが僕の鼻血で赤黒く染まってしまっている。点々とはあるけれど、結構なペースで、染め上げられていつている。

「だ……大丈夫か？ 和真！」

そう聞いてくる美鈴に、僕は大丈夫だよ、と答えた。だけど、美鈴は

「ごめんね。ごめんね。……ごめんなさい。ごめんなさい。ごめん。ごめん……」

そんな風に、壊れた機械が一つの旋律をリピートするみたいに、繰り返すだけだった。よく見てみると、顔は不安に歪み、青ざめているような気がする。今にも、泣き出してしまいそうに、なっている。

美鈴。ほら、大丈夫だよ。……安心して、僕は、大丈夫。そんな風に、できる限り穏やかに、僕は美鈴を落ち着かせるために声をかけたけど、美鈴はその場でへたり込んだまま、動けなくなってしまう。

美鈴は、元々血があまり得意じゃない。それに、自分のせいだという自責の念が追い討ちをかけたのだろう。美鈴は怯えて小さくなってしまう。

もう、無理だなあ。僕はそう思って美鈴を何とか家まで連れて帰ることを考えた。

僕は、美鈴の傍に行く前に、ポケットの中に入っているティッシュを左の鼻の穴に入れ込んで 見た目が多少滑稽になることは避けられない、か から、美鈴に近づいた。過去の思い出から、美

鈴は僕の鼻を見て笑うかとも思ったけれど、でも、美鈴は一切笑うことはなく、小さく震えるように僕を見ていた。

「……帰ろうか。美鈴。……大丈夫だよ。また明日、キャッチボールしよう。今度はミスらないように気をつけるから、さ」

僕は笑顔を作って、手を伸ばす。だけど、美鈴は怯えた顔を元に戻せないまま、すぐ傍にあるはずの僕の手にも、手を伸ばせなかった。しょうがなく、僕は美鈴の震える手を掴み、ゆっくりと引き起こしてあげてから、門限までは大分余裕がある中で家路についた。

美鈴は、僕が手を引かないと歩けなくなってしまうている。震えていて、怯えていて。……そんな美鈴を見るのは、あの日以来のこと。たったこれだけのことで。そういう風に思うのと同時に、僕は本当に大きな失敗をしてしまった、と後悔した。

家についてからも、美鈴は母にもまともに挨拶ができないほどで、後で母に美鈴がこうなってしまった理由について話すと母は静かに僕の耳に呟いた。これは、ちょっと落ち着くまで時間かかるかも。と。

その日の夜、美鈴を家まで送って、そして別れる時に、

「和真……」

そんな風にか細く伝える美鈴の声に、僕は思わず、

「やっぱり……僕の家泊まろうよ」

そう、声をかけてしまった。……それは本当に逆効果だったと、美鈴の体を見て、思った。美鈴は体をビクツと震わせて、

「いや、……ちゃんと自分の部屋で寝なきゃ、ダメだ」

そう言っ、それきり押し黙ってしまった。それは、こんな状態の美鈴の、せめてもの意地……。僕はそれを感じてしまったから、そのまま押し黙ってしまう以外に出来ることなんて、無かった。無いんだ。僕は、……。

「じゃあ」

そう言っ、後ろを振り向いた僕に、美鈴は、

「和真、ちゃんと、明日も来るよな？」

確かに、そう言った。

「当たり前じゃないか……。美鈴。僕は、ちゃんと明日も来るし、キヤッチボールだって、するよ」

僕がそう言うと、美鈴は、そっか、と言って、微かに笑って

それでも、瞳が笑ってはいない、ように感じる　　から、

「また、明日」

そう、言うてから、弱々しく、その手を振った。

家に入って、すぐに僕は眠りに就こうとする。でも、眠れない……。どうしても、僕は寝付くことができずに、ベッドで冴えた目をつむり続けているだけだった。そんなことだから、また僕は考え事ばかりしてしまう。……。そして、余計に眠れなくなる。これは僕の小学校の高学年頃からの悪い癖で、僕は、それを頭で理解していながらも、どうしてもその行動を、思考を、止めることができないでいる。

この夜、僕が考えていることは、ここ一、二週間の間の日常におけること。

何故だろうか、僕が生きている日常の内、その期間のことを振り返ると、何か違和感のようなものを感じる。僕は美鈴とキヤッチボールを続けているだけで、学校ではいつも通りに壁を作り、家でもやっぱり普段通り母や父と会話したり、ご飯を食べたり、勉強したり……。本当に極普通に生活を送っている……。はずなのだが、最近何故かその日常を操作されているような気がする。……。もっとうとするならば、僕のことを先読みし、僕、そして美鈴を操作しようとしている人がいるのではないだろうか。僕はここ数日、今日のように小牧さんや黒木さんが僕の傍にいる機会の不自然な増加や、この家にまでやってきて、僕と美鈴にソフトボールを渡したという男、単なるカンだけどこれは百合神だ　　のことを思い出しながら、思う。そしてもし、そうだとすれば、その首謀者は、あいつしかい

ない。

だが、何のために？ 何のメリットがあるという？ ……僕がそれを考えようとしてもそれはどうしても分からず、ましてや冷静に考えてもみれば、人を操って日常を操作、なんていうこと自体、何の夢物語なのだというのだろうか。……下らない。本当に、下らない。

そんな風に僕が百合神のことを自分の思考の中で切り捨てたところ、ようやく僕の意識にまどろみが覚えられ、僕は、ついに明日の為に眠ることができそうだった……。

朝、僕は目覚ましの音ですぐに目覚めることができなかつた。昨日の僕の悪い癖のせいだろう。時計は既に六時十五分。……僕は頭が重いと感ずる中で、昨日のことを思い出していた。

雪は降っていないくて、でも、だからこそ真つ暗闇で冬の寒さが体に沁みってくる家の外で、僕と美鈴の家の間で、昨日美鈴は震えながら僕の名を呼んだ。そして、明日も来るよな？ そう言った。

僕の言葉に身を奮い立たせて、きちんと僕の誘いを断つた。その時の美鈴は、もう体が震えることはなく、毅然としていた。……が、んばっていた。

だから余計に僕は思う。

行かないと、いけない。そんな風に。

僕と美鈴と一緒に学校に行くようになってから、いつも僕のベッドの傍に置いてある二人分の防寒着と防寒具を手に持ち、そのうちの一人分を玄関で着てから、僕は隣の家へと、美鈴が待つ部屋へと走る。

美鈴の家に着くまでに、一度だけ転んだ。雪は昨日から降っていないのだが、代わりに今は雨が降っていた。転んだ所為で頭は勝手に冷静になってしまって、美鈴の家の鍵を開ける手は、普段以上にゆっくりと、そして普段以上にスムーズに廻った。

家には、やはりあの人居間にいる。だけど今日はいつもと違う。

いつもは虚ろな目をしたまま、椅子に座しているのに、今日は椅子に座ったままテーブルに突っ伏してしまっている。その頭のすぐ近くに、僕の母が用意したものだろ、朝食 サンドイッチが三つに水が入ったコップ が置かれている。一度家が上がっておいて美鈴を連れてこないのは不自然だから、この朝食は昨日の分だろ。サンドイッチには、一つだけ、ほんの少しだけ噛んだ跡のついたものがあつた。水には、ほとんど手が付けられていない気がする。…食欲がないだけならば、それで良い。だが、その後片付けすらせずにテーブルに突っ伏すというのは、一体どういうことなのだろう。僕がおじやましますと言わず、頭を下げずにこの家に入り、美鈴を迎えに来たのは、生まれて初めてだった。

「おはよう。美鈴」

僕がそう言いながら美鈴の部屋のドアをノックして部屋に入ると、僕の目に入った状況は、またしても生まれて初めてのものだった。

「……………。くー。すー。……………しゅー」

……………美鈴が、寝ている。

未だかつて、美鈴が僕が家に来て部屋に入るまで、美鈴が寝ていたことはただの一度もなかったことだ。……………どうということなんだ。

僕は親子揃って僕に見せない姿を二人が見せていることに驚いて、僕は美鈴を揺り動かした。……………そして、あることに気付く。

美鈴の手、なんでこんなに固く握られているんだ……………？

美鈴が掛け布団を必死に掴んで、体を丸めていた。それはまるで起きて朝を迎えることを必死に拒否して、逃げ込もうとしているようだ。見たくないものを目の前にして、目を必死に瞑るように。

美鈴は、ずっと毎日こうだったのだろうか……………。僕はそれを見て考えてしまった。

美鈴は意地っ張りで強がりだった。……………僕が傍にいる時だけは。

僕たちが幼稚園児だったとき、僕たちはそれぞれの親子六人で遊園地に行ったことがある。その時に、どのような流れだったかは忘

れたけれど、それぞれの家族でお化け屋敷に行こうとした。その時に、美鈴がかなり嫌がった。

「こわい。こわい！」

と半ば泣きそうな顔をして。それを見た僕の両親は、僕に「美鈴ちゃんのお父さんとお母さんと一緒に行っておいで」

と僕の背を押し、二人はそこに残ろうとした。僕は両親の意図がわからず、それでもお化け屋敷のシステム　お化けは人間や機械であり、それがうごめいてるだけ　は理解していたから、

「二人ともこわいの？」

などと聞いたけど、両親はたださっきの言葉を繰り返すだけだった。不思議に思ったその時に、突然美鈴が、

「おい！　いくぞかすま！　だいじょうぶだからな！　おまえがこわがってもあたしがずっとそばにいてやるからな！」

そうやって威勢だけはすこぶる良い叫び声をあげて、僕の腕を強引に引つ張っていった。その時に見た僕たちの親が笑っていたことが、妙に印象に残っている。

……その後のことは、単なる笑い話になる。案の定お化けの振りをした人間が出てきて、それに一番驚き、恐がった美鈴がそのお化け　女性だった　を思い切り蹴り飛ばし顔面にパンチを浴びせて、美鈴の両親が、

「すみません！　すみません！」

と平謝りしながら僕と美鈴を抱えて走って逃げたのだ。

それ以来、小学校に上がっても僕たちはお化け屋敷には行かなくなった。……というよりも、行こうと思っても、そこに入ろうとする直前に美鈴が起こす行動を思い浮かべてしまい、行けなくなってしまうた、という方が正しい。

……僕たち六人の関係も、ずっと、あのまま無邪気で、面白くて、楽しかったら、良かったのに。美鈴を揺り動かしながら、僕は思っていた。

美鈴を揺り動かすのを止めてから、ほんのしばらくした後、

「んむ……。むう？」

と声をあげて、美鈴が目を覚ました。そしてすぐに、

「か……。和真！ ……えつと、 ……見たか？ 見ちゃったか？」

と僕に素っ頓狂な声をかけてきた。僕は美鈴の問いかけが寝顔についてであると考えて僕は、おはよう。あんまり見てないよ。とだけ答えた。

「 …… 。なあ、和真 …… 」

僕の答えがおかしかったのか、美鈴の顔は昨日と同様、暗い。昨日との違いは、震えがあるか、ないか。僕は黙ったままではいられなくて、どうしてもいたたまれないような、そんな気持ちになって、どうしたの？ と尋ねてしまっけれど、

「いや、何でもない」

そう美鈴は言ったきり、口を閉じて、まったく何も言わなくなっていました。

無口になった僕と美鈴は、僕の家で朝食を食べる。今日は、フレンチトースト。この前のものよりも、さらに甘く味付けされ、そしてハチミツをトッピングする。昨日の美鈴を見て、母も考えたのだろう。美鈴の、物心ついた時から好物尽くし。普段の美鈴なら、それはもうハイテンションで食べることだろう。 …… そう。普段ならば。

今日の美鈴は嬉しそうな顔をしているし、手も進んでいる。だけど、声をあげず、元気がない。笑うけど、でも何かに怯えている気がする。これは、違う。少なくとも、母の言う落ち着いた状態なんかじゃない。

結局美鈴は、それを食べ終わっても、いつも通りの美鈴ではいられなかった。その様子を見かねた母が、

「美鈴ちゃん。今日、学校お休みしようか …… ？」

そう優しく問いかけた。そんな母を美鈴は見ながら、でも、時折

僕の顔を見て、

「……………。いや、学校、行く」

途切れ途切れになりながらも、ハッキリと、答えた。

僕と美鈴が学校へ行くために外に出る。それは極々当たり前のこと。…………。いつもよりも時刻もペーసుも遅いことを除けば。

美鈴が歩くペーసుは、またキャッチボールをする以前のころに戻ってしまった。しかも、それは、以前よりも重苦しくて、辛い。僕は、結局美鈴に無理をさせ続けているじゃないか。美鈴はとかく強がり、僕の前で泣いたことがあまりなく、泣き言も言わない。

だから、辛いのに

「…………。ねえ、美鈴」

僕も美鈴と同じように学校まで行く足が重くて、だから美鈴に声をかけていた。

「…………。学校行くの、やめちゃおっか!」

できるだけ楽しそうな笑顔で、さも、今から良いことが絶対に待っているに決まってるってくらいの、根拠のない自信を持っているようなトーンで、僕は言った。

「……………。和真は学校に行きたくないのか?」

「…………。うん。たまには、良いでしょ?」

「あたしは…………。あたしは、和真が行くように、行く」

…………。決まりだ。そう思ったのに、結局僕は何故か重苦しい気持ちのままです。いつもの通学路と違う、逆方向へと歩みを進めるのだった。

何故か、なんて、分かっているくせに、僕はそれから目を逸らすんだ

通学路から外れても、道はちゃんと分かる。僕は美鈴の手を引く。でも、一度家を出てから、何の連絡もなく小学校の保健室に美鈴

が来ない……。

そうなれば確実に連絡がくるだろう。僕はただただいつもの通学路ではないが、ぐるりと迂回しただけの道を通り、結局学校に着いてしまう。

「和真、ここ、学校だぞ？」

美鈴の当然としか言えない声に、僕は、

「うん。……着いちゃったね。……学校」

そうとしか答えられなかった。今の時刻は、八時二十四分。美鈴を送れば、僕は遅刻が確定する。石田は面倒くさい小言を言うだろうが、もう僕はそれもどうでも良いと思ってしまう。

不意に、僕の耳にあの日の周辺に聞こえた声が、また、聞こえてくる。

良い子ちゃんの和真くん？ 良い子ちゃんだから悪いことしませーん！ アハハハハア！ 僕ちゃん良い子の和真でえーっす！

ギヤハハハハハハハハ！

ああ。……実に下らない。僕は吐き捨てるような思いを抱きながら、事実、あるいは真実でしかないその良い子ちゃんという言葉が頭で反芻されてしまい、離れないまま、気だるい気分と一緒に美鈴を引き連れて歩くしか、なかった。

「おはよう。……遅かったねえ。これじゃあ和真君、遅刻しちゃうでしょう？」

いつもの先生が、僕と美鈴に声をかけてきた。いつもより十分から十五分遅い到着に、先生が心配しない訳がない。……だから僕もできる限り笑顔で、ポーズで、

「いやあ、今日は二人揃って寝坊しちゃったんですよ。大丈夫ですよ。走れば僕も何とかありますんで。……それでは」

そう言って、ポーズのまま、頭を下げて走り去った。頭の中に、気持ちの悪い、吐き気を催すような声はまだぐるぐる僕の頭を駆け巡っていて、正直辛い。美鈴はそんな僕の後姿を見ているようだったけども、

「美鈴ねえちゃん」

という特別支援教室の中から聞こえる声に、おーう、と声をあげて、先生に連れられて、そこへと入っていくのだ。そうだ。それで、良いんだ。

本当は学校の中を走るのはルールに反している。それは分かっている。でも、たまに僕はあの先生からあんな風に心配されるのが、恐くなる。過去、たった一度だけ、一度だけだけど、ポーズを見透かされた気がしたことが、あったから。だから、逃げた。そのことを改めて心で痛感して、何をやっているんだろう、僕は。……そんな風に思うと、僕は結局、小学校から出た途端に足が止まり、走れなくなってしまう。

どうでもいいとか、そんな感情で、身体に何も異常がない人間が、走る足を止めてしまうことを人が聞けば、それは怠慢だと、それは甘えだと、きつと僕を責めることだろう。数年前の僕は、きつと今の僕を責める。……確実に。

だけど、それは現実だ。他人に良い子だと、言われ褒められることも、そしてそれを悪口として用いて僕を嘲け、罵ることも、たくさんあったし、今でもその通りでしかない僕が、それは怠慢だと、それは甘えだと言われる現象に、今も纏わり付かれていることを思えば、周囲の大人たちが、いかに僕を見ていないか、よく分かる。

そうだよ。僕は良い子ちゃんだ。

だから、僕は学校に回り道をしてたどり着いた。……だから僕は美鈴を小学校に送り届けた。……だから僕は遅刻しても学校に行く。授業を受ける。壁を、作る！

……だけど、僕は走らない。走れないのとは違う。走らない。

キーンコーンカーンコーン……キーンコーンカーンコーン……

八時三十分。このチャイムが鳴り終わるまでに教室に入っていないければ、遅刻。僕は、この音を靴箱で上靴に履き替えているところ

で、
聞いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8851y/>

Little Brave

2011年12月10日01時50分発行